慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジヨン・ エリオツト・ ケアンズの経済学方法論
Sub Title	
Author	浜田, 恒一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1931
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.25, No.9 (1931. 9) ,p.1317(67)- 1374(124)
JaLC DOI	10.14991/001.19310901-0067
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19310901-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

正德享保年間の社會經濟思想は後世の問題を提示し、しかもかくの如き問題を生ぜざるを得なかつた思想過程を示すものとして、甚だ大なる價値がある。春臺の「經濟錄」の如きは當時の經濟學に關する最も纒つた著述であり、又初期以來の經濟論（廣き意味の）を大成したものと見ることも出來よう。そしてその「經濟錄拾遺」は後世の經濟論の前提とも見得ないこともあるまい。又恰もこの時代に蘭學の解禁があつた。新井白石を始めとし、外國に對する新知識は、限られたものではあつたけれども、後年の新しい社會問題の遠き因をなしたものと云へるであらう。吉宗時代は幕府の中興時代と云はれる。しかし思想上に於いては未だ著しい反動的時代とは考へられない。單なる一の過渡期に過ぎなかつた。恐らく新しき町人經濟學が十分の發達を未だなしてゐなかつたからであらう。

ジヨン・エリオツト・ケアンズの經濟學方法論

濱田恒一

目次

序
一、ケアンズのコント論評
二、ケアンズのバスチア論評
三、經濟學の論理的性質
四、經濟學方法論
五、經濟學方法史に關するケアンズの見解

序

ゾンバルトの見解に從ふ時、英國古典經濟學は所謂整齊經濟學に歸屬すると共に、更にその中に在つて、經濟的事象を客觀的勢力の運動より說明せんとする「客觀主義者」に分類される。

凡そ整齊經濟學に屬する者は皆「科學」を探究する。彼等はあるところのものを認識し、彼等の研究成果の普遍妥當性を求める。故に一切の形而上學的要素を拒否し彼等の學問を呼ぶに「科學」の名

を以てする。彼等の見解に從へば精神科學（經濟學は之に屬する）と自然科學とは同一の認識基礎、認識目的及認識方法を有する。洵にかくの如きは自然の認識に於いて眞價を認められたる方法を、そのまゝ社會的文化的、殊に經濟的現象に利用し得るものであり、且つさうなければならぬとする見解である（註一）。ミルは「論理學體系第六編を以つて、前五編の一種の補助であると言つた。何故ならば道德的及社會的科學に適用せらるべき研究方法は、若し科學一般の方法を論じたる前五編が之に成功してゐるとするならば、當然既にその中に記述された事になるからであると（註二）。或は又、力學に於ける思惟方法を直ちに政治學に移し、かくて、政治學は演繹科學でなければならぬ」（註三）と斷定せる如き、這般の見解の一例として考ふべきであらう。

自然科學は完全科學であり、就中最も完全なるものは精確的自然科學である。これは總ての自然科學、而して亦經濟學の少くとも理論的部分の科學的理想である。かくの如き根本的見解に一致して「法則」の發見は自然科學的經濟學の最高認識目的となり、個々の現象は「場合」としてその下に組織される。この「法則」を彼等は理論と呼んだ（註四）。之を裏書すべき文章乃至意見を、英國古典派の著書中に見出す事は容易である。

「分配を左右する諸法則を決定する事、これが經濟學の主要問題である」（リカアドオ、「經濟及租稅原論」小泉信三譯　第三頁）

「經濟學は富の性質、生產及分配を論ずるの科學である――經濟學の任務は一般的原理の敍述である」（シイニオア「經濟學」拙譯第五頁）

「富の生產及分配の精神的又は心理的法則に關する科學」（Mill. Early Essays by John Stuart Mill. 1897. p. 128）等々。

「純乎たる英國舊派の立場に踏み止つた最後の獨創的經濟學者」（註五）ジョン・エリオット・ケアンズの歩める道も亦かくの如きものであつた。

一　コントの方法論に對するケアンズの批評

凡そ經濟學者が默過し得ざるものは、經濟學の獨立性又は可能性を否定するの議論である。殊にかゝる議論が有力なる學者に依つて唱へらるゝ時然りである。さればケアンズは先づコントに向つて一矢を報ゐねばならなかつた。ケアンズの解する處に依れば、コントと雖も富の現象が、社會の狀態と進步とを決定するに重要なる要素である事を拒まざるのみならず、それ等の現象が不變の法則に從ふものである事をも否定しない。けれどもコントは這個の法則が、該現象そのものゝみの研究に依つて確知され得る事を否定する。問題はこゝに存する。コントに從へば、吾人の觀察裡に現れ來る富の事實は、他種の諸事實と複雜に交錯し居れるが故に、之等を支配する法則の決定は、這般の聯合的諸事實と關聯して考へらるゝ時に於てのみ可能である。從つて經濟學なる一科學は不可能である。社會はその諸要素の全體に於て考察せらるべきであつて、社會生活の一面を孤立的に研究する事は、本質的に有害であり、結局失敗に終るべきものである。即ち社會的事實は in the ensemble に研究されなければならないといふ。

周知の如く、コントは科學的知識の諸部門を、その各自の主題の複雜さに依つて、順次に配列す

る。數學に始るこの配列は社會學に終る。これ人間社會の科學は、總ての現象中、最も複雜なるものに關與するが故である。コントが自然研究の方法を社會的研究に用ゐる事を否定するは、この分類原理に基くのである。

コントに從へば自然科學に於ける方法即ち複合的現象をば、これを構成する要素群に分析し、各群を個々に研究してそれ等の法則を決定し、然る後、それ等の法則を結合して當初の現象を說明する方法が、自然科學に於いて有效なるは、對象たる現象の性質が複雜でないからである。從つて現象が複雜となるにつれ該方法は次第に不適切不有效となり、遂に全く無效となる點に到達する。こゝに至つて、之と反對の方法を採用する必要が生ずる。所謂綜合に依る研究（investigation through the ensemble）之である。方法を變更すべき這般の點は、コントの語るところに依れば、無機的現象から有機的現象に移る點に一致する。從つて有機的科學は一般にこの綜合の原理に則つて研究せらるべきである。最も複雜錯綜せる社會現象に至つては、這般の準則は絕對的命令的であると、ケアンズは斯の如くにコントを解する（註六）。

この理解に基き、如何に之をケアンズが檢討するかゞ次の問題である。

コント說に對するケアンズの最初の疑問は、問題が複雜となるに從ひ、何故に特殊化の方法がその有效性を喪失するやの疑問である。コントによれば、高度に複雜なる現象は亦その要素間の連帶（ソリダリティー）が高度である。從つてかゝる高度に複雜なる現象は、その部分よりも總體が、却つて良く吾々に知られるのである。こゝに於てか歸納論理の原理に從つて、總計（アングリゲイツ）の研究より始めてその法則を決定したる後に、より知られざる諸要素の研究に進まねばならぬといふ。

先づこゝに云ふ「社會の ensamble」とは如何なる意味であるか。それは社會現象は單純なものとして表はれず、合成的なものであるといふ意味に解せられなければならない。然らば社會はその要素に依つて吾人に知られるのではなく、綜合に依つて知られるといふ事は眞實である。けれども、ケアンズに依れば、若しコントの眞意がこゝにあるとするならば、物的現象も亦合成的であり、從つて綜合を通じて知られるといはなければならない。かくて元に歸つて、何故に社會の研究と物界の研究とでは、その方法を逆にしなければならないかの疑問に當面する事になるのである（註七）。

この疑問に對するコントの答は、既述の如く、現象の連帶性はその複雜さに反比例するとの學說に拘らず、兩元素の連帶は頗る緊密で、水を二元素に分析せる事は化學史に一紀元を劃せる程である。之に反して水と石灰の結合なるより複雜なる現象を考へるに、その連帶性は却つて減少し、石灰の水化物から水又は石灰を分離せしむる事は、水又は石灰の構成要素を相互に分離せしむるよりは遙に容易である。かくの如きは二三の特例に非ずして廣く化合に就いて存する規則である。されば複雜性と連帶性の關係はコントの主張と反對の如くである。コントは社會現象に於ける共同的要素の連帶性が物的世界の現象に於けるそれよりも大なる事を示さねばならなかつた。否、研究方法を變更しなければならない程に大なる事を示さねばならない筈であつた。然るに之が爲めに、彼は一片の論證をさへ爲さなかつた。從つて「連帶性」を理由とする方法變更の主張は、不充分なるもの

と言はねばならない（註八）。

次は經濟學の實證性の問題である。こゝに「實證的」とは「神學的」及び「形而上學的」に對する意味に於てゞある。コントは人智の發達を三段階に分つ、神學的段階、形而上學的段階及び實證的段階之である。神學的段階に於ては、人は存在の本質的性質、即ち、絶對的知識を追求し、一切の現象を以て超自然的存在の直接的行動に依つて作らるゝものと想像する。換言すれば宇宙の諸事實を、因果の不可變なる法則に依つて支配されるものとしてゞなく、實在的或は想像的の、生命と叡智とを有するものゝ單一なる、而して直接の意向に依つて支配されるものとして考へる。形而上學的段階に在つては、超自然的存在の代りに抽象的なる力が想像される。それは總ての存在に內在する純粹なる本質であり。總ての現象を造出し得るものである。この段階に於ける現象の說明とは、各現象をその特有の本質に關聯せしむる事に過ぎない。この段階は第一段階の變形にすぎない。理性の幼稚なる時代に於ては、個々の物體は生命あるものと考へられる。この思想に一歩を進むる時生ずるものは、不可視なる存在の觀念であつて、此の如き存在が事物又は事件の總てを監督し支配する。最後にはこの神性を有する多數の事物が單一なる神となり、この神が生宇宙を創造したものであり、現在ではその不斷の行動に依つて諸現象を指導し支配すると考へられる。更に進んでこの單一なる神の思想が、具體的物體の裡に內在すれども然もそれとは區別されるところの一つの力、一つの勢力、或は一つの玄奧なる性質なる思想に代る時、形而上學時代となるのである。最後の段階即ち實證的段階に在つては、人は諸現象の窮極原因の探究を放棄し、單に諸現象間の不變の法則、即ち繼起と類似との不變的關係を求むる事に從事する。詳言すれば、吾々は現象に關して以外には何等の知識も持たない。そして吾々の現象に關する知識は、關係的のものであつて、絶對的のものではない。吾々は如何なる事實に就いてもその本質を知らず、亦、その作出の眞の方式をも知らない。知れるものは、たゞ繼起或は類似に於けるその者の諸關係のみである。此等の諸關係は不變である。即ち同一の環境に於ては同一である。諸現象を互に結合するところの常住的なる類似、及び諸現象を先件及び後件として結合する處の常住的繼起は、それ等の法則と名付けられる。現象の諸法則こそ吾等が知り得る總てゞある。現象の本質的性質、それ等の究極の諸原因等は、吾等にとつて知られざる、測知し難きものであると考へられる（註九）。

かゝる見地より看る時、經濟學は遂に形而上學的たるを免れないものであるとコントは斷ずる。經濟學者の考ふる處に依れば、經濟學の主題は一般社會科學とは全く分離し獨立せるものである。然るにコントに依れば、社會の經濟的若しくは產業的分析は社會の過去及び現在に於ける知的道德的及び政治的分析を離れては、實證的方法に於いては成就され得ない。經濟學者が吾人に示し得るものは抽象的なる概念にすぎない。かくて經濟學の自負されたる孤立は、それが形而上的基礎に立てる事を立證するといふ（註一〇）。何故なればコントは、現實化されたる抽象に歸する事によつて現象を說明する事を、形而上學的方法と名付けるからである（註一一）。

更にコントは想念が科學的たる事の最も確實なる象徵（サイン）として、想念の繼續と有用性とを擧げ、この二つの試準に依つて、再び經濟學の實證性を試みむとする。

コントに從へば、所謂經濟學の歷史は繼續性を有せざるものである。現在の諸經濟書は過去の思想の成果であり、發展である代りに、全くその著作者各自の性格と共に異るものであり、最も根本的なる諸觀念を疑問の裡に投入すると共に、その獨斷的なる構成は、何等眞實にして確實なる進歩を與へる事なく、古き論爭の徒勞なる再生產に過ぎない。經濟學者等はアダム・スミスをその祖と稱するの權利はない。若し彼等が眞に、アダム・スミスの科學的承繼者ならば、彼等は何處に於て彼等がその師の學說を繼續し完成せるか、又、如何なる新發見をその師の初步的研究の上に加へたるかを示すべきであらう。不偏不黨なる眼を以て、價値、效用、生產等の最も基本的なる諸觀念に關する彼等の論爭を眺むるならば、それは煩瑣學者の論爭を想起せしめると（註一二）。之に對しケアンズはコントが採用せる試準を以て、「疑ひもなく健全である」と認めると共に、それに依つて試準されたる結果が、コントの結論と著るしく異る事を力說する。ケアンズと雖も、多くの經濟學文獻が確にコントの言ふ如く「形而上學的」である事を認めると共に、これが二つの事情に由來するものであるといふ。第一は凡そ社會的問題は、個人的及び階級的利害關係、及び之を通じて一般政治學に密接な關係を有し、從つてかゝる問題に於ては一般公衆の感ずる利害が鋭敏なる事、第二は術語の缺如及び俗語を使用するの必要これである。その結果として、かゝる論題に就いての議論には多數無資格者が蝟集する。けれどもかゝる事は決して經濟學の特有事に非ずして、社會學の如き一層然るものである。されば結局經濟學の實證性の問題は、著名なる經濟學者の著作に現れたる學說に依つて決せられるべきである。然るにマルサス、セイ、リカアドオ、トウク、シイニオア等の人々の著作を顧るに、學說の連續性、未成育なる觀念の發達の例として、これ程に著るしいものは、物的思索の歷史に於ては容易に見出し難いものであると斷じ（註一三）。スミスの生產論・價値論・外國貿易論・貨幣論等が、此等の後人に依つて如何に發展せしめられたるかの歷史を略述して、自說の證據とする（註一四）。

惟ふに十九世紀前半の英國經濟學界は、碩學鴻儒輩出してその極盛時を現出したると同時に、經濟理論に關する論爭も亦最も熾烈を極めたのであつた。リカアドオ對マルサスの價値尺度論爭を最大なるものとして、其他人口に關するマルサス對シイニオア、賃銀に關するミル對ソーントン及びロング等の論爭を數へる事が出來る。從つてこの點に重きを置くならば、コントの言葉も一應は肯定出來るかも知れない。併し乍ら、個々の學說よりも經濟學全般を考慮するならば、寧ろケアンズ說が遙に多大の眞理を含めるものといはねばならぬ。スミスに依つて開拓されたる生產論に始る正統派經濟學は、マルサスの人口論を俟つて、リカアドオの分配論の展開となり、シイニオアの利子論之に加つて、遂にミルの綜合的經濟學となつた。然もこの概觀的完成は、個々の經濟學者の脈絡なき努力の自然的成果ではなくして、各自がその先人の學說の修正と補遺と宣明とに努力せる成果である。されば此の點に關するコントの批評は失當といはねばならぬ。經濟學者ケアンズが「コント氏は氏が痛罵せるその科學部門に就いて、何等確實なる知識を有しなかつた」（註一五）と極言するのも、强ち無理とはいはれない。

次いで他の試準即ち有益性に移る。コントに從へば、經濟學史を歷史的に注目し、殊に科學的見

地よりも政治的見地より眺むる時、それは革命時代を通じて、一時的ではあるが然も不可缺なる作用を及ぼせる、批判的哲學體系の終局的本質的一部を構成する。經濟學は中世の經濟制度を徹底的に不信ならしむる事によりて、這般の廣汎なる知的鬪爭に參與するの光榮を有したのである。經濟學に屬する名聲は正に此の如きものであると、（註一六）その反面に於て經濟學の最惡なる實際的過失は混亂を組織化せる事である。それは舊經濟制度を非難する事に滿足せずして、更に進んで、社會の自發的發達を促進する最善の手段として、一切の制規的干涉の缺如を、普遍的敎條として設定した。かくて凡ゆる重大なる事件に際して、經濟學が急迫せる實際的必要に應ずるの道は、たゞ這個の組織的否定を型の如く反覆するだけである。產業發展の途上に重大なる困難が發生する時、常に經濟學は之を看過する。「機械」の問題の如き、能く之を實證する。併し乍ら、之と同時に經濟學は全人類の利害が相互に結合せるものにして、從つて永久的調和を爲し得るものである事を力說する事に依つて「或者の繁榮は他の者の損失によつて獲得されるべく、從つて富の總額は不變なり」との、有害にして不道德なる偏見を排除するの效果を有すると（註一七）。

此の如きコントの意見に基きて、そのいふところの有益性を以て、ケアンズは學說が實際生活に適用されて擧げる效果の意に解し、而してかゝる意味に於ける有益性は決して適當なる試準たり得ないと主張する。何故ならば、科學原理の實際的適用は科學的知識の偶然的結果であつて、本來の結果ではないからである。然もこの不適當なる試準に據るも、經濟學は堂々その試査に堪えるものである。高利禁止法の廢止、自由貿易の採用・英國の植民政策・英國の財政・貨幣・救貧制度等の改革等は、皆、當然經濟學に歸せらるべき效果なるが故であると（註一八）。此の如き反駁は所謂論難的價値を有する。併し乍ら既に「有益性」を以て試準として不適當なりと看做す以上、この試準に合格する事は決して眞の合格を意味するものでない。玆に於てケアンズは之に代るべき試準を自ら提出しなければならない。

ケアンズが提出する眞の試準は、自然を理解し現象を說明するの力である。從つて問題は果して此の如き意味に於ける「有益性」の證據を經濟學が與へてゐるかどうかである。この點に就いては、ケアンズの解する處では、コントと雖も經濟學が經濟現象を理解するの任に堪える事を認むるものゝ如くである。たゞコントの反對は、經濟學がその宣明する法則の或ものに附隨する有害なる結果を防止し得なかつたといふに在る。けれども經濟學は社會的病患の萬能藥を有するものでない。それは富の生產、蓄積及び分配の法則を明にするものである。而してこの意味に於ては經濟學は充分「有益性」を有するの證據を與へて居るといふ（註一九）。ケアンズは明かに經濟學の「科學性」を力說する。されば彼の立場に立つ時、コントの第二試準を不適當とするは洵に當然といはねばならぬ。然るにコントの立脚地よりすれば、苟くも經濟學にして眞に實證的科學ならば、それは當然彼の意味に於ける「有益性」を有すべき筈である。否、進んでは、第二試準をケアンズの意味に解する時は、經濟學は決して「富の生產・蓄積分配の法則を明にする」ものでないと言ひ得るであらう。かくて問題は試準の解釋や、或はその試準に堪えるや否やではなく、それ等の問題の根柢に横る根本的立脚地の當否に歸せられなければならぬ。

又コントは經濟學者等が根本的なる諸點に就いて意見を區々にする事を擧げるも、これ亦決して經濟學のみの事ではない。從つて意見の差違は經濟學の實證的性質と矛盾するものでないと（註二〇）。

最後に論ぜらるゝものは社會現象の科學的豫見の問題である。コントはこれを以て眞正なる科學の試石として、他の一切のものを包含すると考へる。吾人は社會現象を以て、その複雜性に矛盾せざる精密さの限度内に於て豫見され得るものと考へなければならない。社會現象の豫見は次の三事を想定する。第一に吾々の想念を組織的に觀察に從屬せしむる事に依つて觀察されたる現實の基礎を採用せんが爲めに、形而上學的觀念の世界を棄てる事、第二に政治的思想は絶對的たる事をやめて、可變なる文明狀態と相關的であり、之に依つて、事實の自然的經路を追求する理論は、之等を豫見する事が出來る事、第三に、永久的政治行動は決定的法則に依りて支配される事之であると。（註二一）　然るにケアンズの意見に依れば、經濟學に於ても一定の結果が一定の原因に從つて來るべしとの豫言ならば、之を爲し得るのである。從つてこの程度に於てならば、經濟學も亦豫言の力を有するものと言ひ得られる。けれどもコントの意味は更に一層廣汎である。即ちそれは單一なる結果のみでなく、「理論的血緣」に依つて原基的原因に依存する一聯の結果をも豫見するの力であるかの樣に思はれる。果してかゝる力をまで經濟學は有するものであるか。經濟學の豫見は經濟的事件の實際的秩序の豫見にまで達し得るものであるか。これは否定に於いて答へられなければならない。經濟學の豫見は事件の豫見に非ずして、傾向の豫見である。然もその傾向たるや、斯學が酌酌せざる他の諸傾向に依つて打消され得るものである。けれどもかゝる事件豫見の無能力は斷じて經濟科學の不完全を證するものではない。不完全はこゝに存せずして、經濟學と密接なる關係に立つ他の諸科學に存する。これ等の諸社會科學が經濟學の程度に進歩する時、コントの考ふるが如き事件の組織的豫見が、可能となるであらうと（註二二）。

かくの如き社會現象の豫見に關する兩者の見解の差違は社會科學に關する兩者見解の根本的相違を最も明白に曝露する。コントにとつて一の科學が實證的なることは、それが飽くまで現實的なる意味である。その法則は抽象に於て眞なるに非ずして、具體的に眞でなければならない。これに反しケアンズに在つては、それは抽象に於てのみ眞であり、而してそれで充分なのである。さればコントの言ふ如き豫見は、到底一經濟學の爲し得べきところではない。然もコントの立場よりみるならば、その事こそは綜合的社會科學の存在を必要とする事なのであり、綜合的方法の必然性を立證するものなのである。

二　ケアンズのバスチア批評

コントに對して經濟學を防衛せるケアンズは、亦、バスチアに對して痛烈なる論評を試みる。それは一八七〇年十月の「フォトナイトリー・リヴイュ」誌に於て行はれた。

「科學は如何なる國にも屬しない。けれども一科學を開拓するの方法は、その開拓者等の間に行はるゝ哲學的思想の習慣に依つて影響されざるを得ない。この影響は、科學の主題が人間の知性と意思とに直接接觸する事が大なるに從ひ、益〻强大となる」バスチアの著作は佛國政治學者の間に於て、かゝる傾向を示す最も價値あるものである。經濟學はバスチアの先人等に取扱はれたる時、物

的幸福の事實を支配する自然的原理の開陳を目的としたけれども、然も之等の經濟學者等は彼等の學說の道德的社會的關聯を指摘するを回避しなかつた。然も尙彼等は概ね彼等が敎ふる科學の理論と、これより引出さるべき實際的敎訓との區別を認識した。經濟學は彼等の手に於ては實證科學であり、その方法は歸納と演繹との結合であつた。その結論は假說的眞理を體現した。その目的は現象の說明であつた。併し乍らかくの如きものは、バスチアの希求する目的に適合するものでない。それは私有財產、產業自由、契約及交換の自由等の近代社會の基本的制度の成果の中に現れたるまゝの事實を、肯定するものでなくてはならない。單に事實を說明するだけでは不充分であつた。「在るところのものは、その現實の總體に於て、在るべきところのものに一致する事を立證せんとする」ものでなければならない。科學は先行的結論を有しないものであるのに、バスチア經濟學の問題は先行的結論の立證であつた。一言にして言へば、經濟學はバスチアの手に在つては、第十八世紀後半を通じフランスに繁榮せる、政治的社會的事項に關する思惟形式の一例となつたのである。云ふまでもなく事實と當否・科學と道德とは別個に考察され論議されなければならない。然もバスチアの方法は、單に科學と道德を結合せるのみならず、之を混同するものであると(註二三)。バスチアの意圖を知り、その著作を顧みる者は、かゝるケアンズの批評が大體に於て肯綮に當れるを感ずるであらう。

三　經濟學の論理的性質

キインズの所謂「永く英國經濟學の權威ある敎科書たりし「經濟學の特性とその論理的方法」は一八五七年ホウェイトリー經濟學講座の敎授として行へる講義から成つたものであり、一八七五年二月彼の死の直前に訂正されたものである。筆者は初版と訂正版との比較を試みたかつたのであるが、不幸にして初版は見るを得なかつた。

先づケアンズは一經濟學の主題たる富は科學的取扱を受け得るものなる事、二、その生產及分配の法則が存在する事、三、人類はその產業的活動に於ては、單なる氣紛れや偶然事に支配されずして、廣く絕えず作用し、その故に發見され分類され、そして爾後の演繹の原理として役立たしめ得べき諸動機に支配され得る事、四、人類行爲の諸法則と諸動機の研究は、宗敎及倫理の情操と義務に背反しない事を、既に承認されたものと看做すものである。この中第四のものは經濟學の科學的要請ではないから之を省き、殘る三つに就いて考察するに、第一前提は第三前提がある以上、恐らく無用であらう。經濟學は單に物財としての富を論ずるのではない。富を中心とせる人間活動即ちの〻合法性の前提の如きは、無用たるのみならず、無意味であらう。又、第二前提は第三前提の部分又は特殊の場合に外ならない。從つて先づ注目せらるべきは第三前提でなければならない。この前提は苟くも經濟科學の存在を肯定する以上、必然的に認められなければならない。即ち、當然の論理的前提でなければならないと同時に、その眞理性は經濟學そのものに依つて示されねばならない。然るに第二前提の論理的性質は少しく之と異る。それは經濟學の存立に論理上必要なる前提ではない。强ひて言へば生產理論及分配理論の前提といへるかも知れないが、本來生產理論とか分配理論とかは、經濟理論の分類上與へられた名稱に過ぎないのであつて、その論理的性質に於ては他

の經濟理論と異らない。從つてそれ等の存立上特に別個の前提を必要としない。他方第二前提は勿論分類原理ではない。從つて第二前提は蛇足なりとの結論に到達する。

這個論理的前提の外に、經濟理論そのものゝ形成に必要なる、いはゞ具體的前提が存する。筆者は更に之に就いて論述しなければならない。

この問題は經濟學の對象たる經濟現象の性質を分析する事から始めらるゝを有利とする。今ケアンズの立場を明にする爲めに少しく論述の範圍を擴大して、ミル及びシイニオアを、本問題に關する限りに於て顧みよう。ミルに從へば人智の全野は自然科學と精神科學に分たれる。自然科學とは物及び一切の複雜なる現象を物の法則に依存する限りに於て論ずる學であり、精神科學とは精神及び一切の複雜なる現象を心意の法則に依存する限りに於て論ずる學である。兩者の區別は各が關與する對象に存せずして、對象を取扱ふ範圍の差より生ずるといはねばならない。かゝる立場より看る時、富の生産の法則は經濟學並びに總ての自然科學の兩者の主題であるが、然もそれ等の法則中、純粹なる物の法則は自然科學に屬し、人心の法則は經濟學に屬する。換言すれば、經濟學は物の生産及び分配に關與する心意の現象如何を研究すると(註二四)。即ちミルは經濟學の對象が物心兩界に跨るものである事を認めてゐる。惟り經濟現象のみでない。政治學の對象の如きも亦然りである。けれどもミルの信ずる處に依れば、心意の法則と物の法則とは頗る異つたものであるが故に、之を同一研究の異部分と爲し得ざるものである。故に物心兩者の屬性に依存する複雜なる現象は、二個の全く別な科學の對象となり、その一はその現象が物の法則に依存する限りに於て之を取扱ひ、他の一は心意の法則に依存する限りに於て之を論ずる事になるのである(註二五)。シイニオアはこの意見に讃意を表して曰く「かゝる意見の正當なるは明白である。これが判然と述べられたのは初めてゞあるが、暗默の間に從來行はれてゐたのである。經濟學者は機械學的法則や、化學的法則を述べようとはしなかつた。經濟學者が自己の爲に保留せるは、經濟的行爲を支配するの心的法則であつた。彼が自然科學に依つて與へられる諸事實を、自己の前提として用ゐる時、彼はそれを說明しようとはしなかつた」と(註二六)。

けれどもケアンズはこゝからミル及シイニオアと袖を分つた。彼に從へば經濟學は精神科學の範疇にも、自然科學の範疇にも屬しない。精神的自然も物的自然も共に、經濟學者の研究の主題を形成しない。彼は物的現象を考察すると共に、等しく精神現象をも考察する。けれども孰れの場合にも於ても、之を以て自己の科學が說明しなければならぬ現象としてゞはない。固より經濟學の主題は富である。而して富は物的對象の裡に存するも、然もそれは物的なるが故に富たるに非ずして、價値を有するが故である。即ち精神に依つて與へられたる一屬性を、それ等が有するが故である。かくて經濟學の主題は純粹に物的なものでもなく、純粹に心的なものでもない。それは複雜な一特性を有し、自然の兩部門から等しく引出される。その法則は物の法則及び精神の法則に等しく依存するも、然も法則そのものは精神的法則でもなければ物的法則でもない。かくて經濟學は一種の中間的地位を占むるものであり、歷史的、政治的、社會的研究を包含する研究の種類に、關聯せるもの

引用せる句の示す如く、ミルは事象を物と心の二つに分けた。そしてこれよりして知識を精神科學と自然科學に分つた。事象を二元に分つて考へる事の當否は別として、假に之を肯定するにしても、この事よりして直ちに、人智を自然科學と精神科學に分ち、總ての科學を、この何れかの範疇に必ず屬せしむる事には多くの疑問の余地が存するであらう。況んや經濟法則を以て、精神的法則と看る事は、容易に肯んじ難いに於いてをやである。ケアンズの認めた如き中間的科學の存在を、何故に、たとへ一應でも考へなかつたのであらうか。さればとてケアンズの如く、漫然「一種の中間地位」と言ふ事も亦認識不足の譏を免れないであらうが、事實を卒直に表明せる點に於て、ミルよりは一歩を進めたるものとも言ひ得るであらう。けれども科學體系中に於いて經濟學が占むべき地位に關する兩者見解の相違は、いはゞ言葉の問題に過ぎない。何故ならば經濟學の主題が、物心二つの複合的性質を有するの根本的事實は、兩者の等しく認むる處だからである。

既に經濟學が一の中間的地位を占むるものである以上、その主題は物的・心理的及精神的諸法則の結合による複合的現象にしてかゝる現象を、その物的・心理的及精神的諸原因にまで辿る事が經濟學の職能なのである。けれども此等の諸原因諸法則そのものを說明する事は、經濟學の任務ではない。それ等は經濟理論を演繹すべき前提なのである。

洵に經濟學の前提は他の知識部門の結論及び近接的現象より成るものであつて、實に人類に於ける一定の心的感情及び動物的性向、生產の行はれる物的諸條件、政治的施設、產業的技術の狀態等の事實である。此等は富の現象の發生し來る源泉であり、恰も太陽系の諸現象が自然界の物的諸力及力學的諸法則から發生し來るに等しいのである（註二八）。併し乍ら、他部門の知識の結論及び近接現象の總てが經濟學の前提たるものでない。こゝに於てか經濟的研究に適切なるものと、然らざるものとが區別されなければならない。それは如何にして行はるべきであるか。この問題に對する解答は、概ね經濟學が成就せんとする目的を考察する事に依つて決せられなければならない。經濟學の目的は富の生產及分配の法則を發見するに在る。故に經濟學の前提を構成するの諸事實は、富の生產及分配に影響するの諸事實でなければならぬ。然もかゝる事實は無數であり、その性質は多樣であり、それ等の關聯の法則は不明瞭である。例へば富の追求に於いて、人類に影響する願望、欲情、性向等は殆んど無限である、けれども、それ等の間に在つて、或種の原理は頗る顯著なる特性を有するが爲めに、確知され得べく、又、一度確知されたる時は、富の生產及分配の最も重要なる諸法則を、それ等の法則が精神的原因に影響される限りに於て、決定するの素材を與へ得るものである。之を把握する事が經濟學者の第一任務である。次いで人間性に結合せる主要なる生理學的事實を採用せねばならぬ。そして最後に人間の勤勞がその上に行使せらるゝ自然的生產要因の主要なる物的特性を確知しなければならぬと（註二九）。

而して這般の前提中の重要なるものとして、ケアンズが先づ擧示するものは、物的幸福に對する一般的願望、及び之を取得する手段としての富に對する一般的願望、目的を最易最短なる手段に依つて達せんとする性向に伴つて、目的に對する手段の有效性を判斷する知力、――即ちこれ等の精神的事實より、可及的少量の犧牲を以て富を取得せんとする願望が生ずる――、人體の生理的狀態

と結合して、人口法則を決定するの傾向、土壤その他、人間の勞働と創意が行使せらるゝ自然的要因の物的性質等之である（註三〇）。これはシニオアが經濟學の四基本命題として擧示するものに頗る類似する。即ち、「富に對する一般的願望」「人口法則」「收穫遞減法則」「資本の增大に依る生產力の增加」が這個四基本命題と謂はるゝのであるが、第一と第三は全く兩者共通であり、第二は、ケアンズの「土壤其他人間の勞働と創意が行使せられる自然的要因の物的性質」中に包含せられる。第四はケアンズの前提中には含まれてゐないが、この命題の基礎たる制欲はケアンズも之を承認する。

這般の前提中、土地に關しては特にケアンズは一論文を草してその經濟學に對する重要性を檢討してゐる「經濟學と土地」（Fortnightly Review, January 1870）と題するもの之である（註三一）。

之等の諸前提の外に正統學派の人々の總てが設定し來つた一假說がある。自由競爭の假說である。固より彼等と雖も、現實の經濟社會が決してその自由競爭に於て、理論的完全さを有するものでない事は認めたけれども、これに對する妨碍は結局「妨碍原因なければ」或は「他の事情にして不變ならば」等の制限的字句を以て表現せらるべく、之が原理に及ぼす影響は一種の歪として、後に斟酌せらるゝを以て充分なりとした。然るにケアンズは彼の不競爭集團說にも看取せらるゝが如く、這個自由競爭の假說に重大なる制限を附するものである。

更にスミス以來の世襲財產として殘されたるものに「Laissez-faire」の思想がある。ケアンズに從へば所謂 Laissez-faire は實踐的準則としての、及び科學的原理としての二樣の意義を有する。實踐的準則としてのそれは、たとへその意義を減少し來つたとは云へ、尙他に比ぶれば比較にならない程安全な指導者である。けれども科學的原理としては、既に倒壞せるものである。科學的理論としての Laissez-faire は次の如く主張する＝人類が到達してゐる道德的智的發達の實狀に於ける、ありのまゝの人類を考へ、更に、人類を圍繞する世界の物的事情を考慮に入れ、最後に最も近代的なる國家に於て了解され、維持されてゐる如き私有財產制度を受入れるならば、自利の刺戟は個々人を導いて彼等の物質的幸福に關與する彼等の全行爲に於て、彼等自身の福利及び總ての人の福利に最も有利なる徑路に自ら進ましむるものであると。然るにかゝる主張は二つの想定を包含する。その一は人間の利害は根本的には同一である事、即ち自己に最も有利なるものは亦他人にも最も有利であるとの想定であり、その二は各個人は他人の利害と一致するとの意味に於て自己の利害を知悉し、且つ强制なくんば、この意味に於て自己の利害に隨ふとの想定である。ケアンズは先づ第一想定を肯定し、充分了解される時、人類の利害は根本的に一である事を確信する。然るに第二想定は、第一想定が眞なるが如くに、誤謬であると斷定される。所謂樂觀主義の徒は第二想定をも肯定するのであるが、その論理は誠に奇妙である。「人類の利害は自然に調和的である、故に吾等は人民を自由に放任せなければならぬ。然らば社會的調和は結果し來るべきである」と論結し、恰も第二想定は自明の理なるが如くに考へ、これを妨ぐる欲情、偏見、慣習、階級的利害等の存在なきものゝ如くに言ふのである。人々が自己の利益を追ふに當つて、他人の利益なりと考ふるところのものに一致せんとするの事實を示す事は、固より易々たるものであるがこの事と、眞に他人の利益に一致すると

の意味に於て、自利を追ふ事との間には間隙が存する。Laissez-faire 學徒の議論に於けるこの間隙には、今日まで橋梁が架せられてゐない。人間は自己の見解と性向とに從つて自己の利益を知り之を追求する。必ずしも他人及全般の利益に一致する意味で自利を追求はしない。從つて社會の經濟現象が常に共同の福祉に最も適する樣に、自發的に自己を調節するとの保證はないのであると（註二三）。これスミス以來經濟學の背景を爲せる哲學的思想乃至公理を大膽に否定せるものである。然るに他面に於いて、之を理由とする自由放任の準則を以て、漠然「安全なるもの」として承認せるは論理的一貫を缺けるもの、若しくは不備を示すものといはなければならない。

更に一言附加すべきは、シイニオアは這般の四前提を以て、意識又は觀察の結果である（註三三）、即ちミルの言葉で云へば直接歸納の結果であると述べてゐるがケアンズも略、之と同樣な事を言ふ。「彼等（經濟學者）は斯學の立證を要せざる原理例へば最少の犧牲を以て富を得んとする願望の如き、意識に直接依存するものは、之を暗默の裡に假說する」と（註三四）。

上述せる前提論中に在つて、最も重大なる意味を持つものは、經濟學が窮極原因の知識から出發するの一事である。何故ならばケアンズの經濟學方法論は、この事實の認識から決定的影響を蒙るからである。筆者は續いて經濟學の定義に關するケアンズの見解を窺ひたる後、その問題を論じたいと考へる。

最も簡單に定義される時、經濟學とは富の科學である。科學なる語の近代的意義を明白に理解する者にとつては、この定義は斯學の範圍とその論ずるところのものとを、充分に指示する。經濟學は天文學・力學・化學・生理學が科學たると同一意味に於て科學である。異る處は主題である。後者の取扱ふものは物的宇宙の現象であるが、經濟學の論ずるものは富の現象である。併しその方法・目的及び結論の特性は兩者全く一である。後者の諸科學が爲す處のものを、經濟學も亦、富の現象に對して爲すのである。それは富の現象の共在又は繼起の法則を解明する。約言せば富の現象の法則を解明すると（註三五）。「經濟學の特性及その論理的方法」は一層精密なる定義を下して曰く「人性の諸原理、外界の物的諸法則、並びに幾多の人間社會の政治的社會的狀態を窮極的事實として承認し、以て之等の結合的作用より結果する、富の生產分配の諸法則を研究する學」又は「人性の諸原理・外界の諸法則及び物的、政治的、社會的出來事の中に於て、富の生產及び分配の現象をその原因にまで尋究する科學」と（註三六）。

こゝに於て、富の生產、分配現象の法則とは何ぞやと問はねばならぬ。「Essays」に依れば富の現象とは富の事實に過ぎない。生產・交換・價格等の事實若しくは勞銀・利潤・利子・地代等分配過程に於て富が採る種々の形式を言ふに過ぎない。而して之等の法則とは勿論それ等の間に存する自然法則である。こゝに自然法則とは富の現象が相互に、又はその原因に對して立つ一定の恒常的關係である。例へば英國に於て資本は或增加率を以て增加する。合衆國に於てはその率は一層急速であり、支那に於ては却つて緩漫であるとせよ、之等の事實は偶然的なものではなく、諸原因の自然的結果である。諸國の外的・物的環境・その住民の知性・及品性その政治的社會的制度等の結果である。而して這般の諸原因が同一なる限り、結果も依然變動しないのである。即ち諸原因と現象の間には、

恒常不變なる關係が存する。經濟現象の裡に表はれたるこれ等の恒常的關係を富の現象の法則といふと(註三七)。"Character" に於いて言ふ處も全く之に異らない(註三八)。

かくの如き經濟法則は現實の事實を表現するものに非ずして、一の「傾向」を表すに過ぎないものであるといふ。之に就いてのケアンズの意見は各所に現はれてゐるが、「經濟學主要原理」第二編第一章第十一節に在るものを先づ檢討しよう。第十一節はソーントンが賃銀基金を以て「必定的」のものと解し、かゝる必定的なる基金は存在しないと主張するに對してのケアンズの反駁である。「賃銀基金をソーントン氏の如く解すれば、氏の立場は攻擊され得ない。疑ひもなく、資本所有者が必ず賃銀に費さねばならぬ特定部分なるものはない」けれども賃銀基金說はかくの如く解さるべきではない。「少くとも余は斯說をかくの如き意味に解した事はない。附言するが、若し經濟理論一般が、こゝで賃銀基金說に附せられた如き意味に、即ち、人類を强制してその性向及意思の如何に拘らず、一定徑路の行爲を採用せしむる原理を表はすものと解されるならば、經濟學の範圍內に於て十分間と非難に堪え得る原理はたゞの一つもない。經濟理論の全建築は倒壞し去らねばならぬ。經濟學に於ける法則は法律的强制でも、肉體的强制でも將亦、道德的義務でもない。經濟法則の主張するところは、人がその欲すると否とに拘らず、しかく爲さぬばならぬといふ事でなく、一定の環境の裡に於ては人はしかく行ひ易きものであるといふ事である。自利その他の感情が人をかゝる結果に導くであらうといふ事である」と(註三九)。

「經濟學の特性と論理的方法」第四講は幾多の實例を擧げて、經濟法則は事實を表はすものに非ずして、傾向を表はすものである事を詳說する。

先づ「生產費は自由に生產される貨物の價値を支配す」との原理が檢討される。第一にこの理論は貨物が不變に例外なく、各個の生產費に比例して交換されると解されてはならない。それは例へば一八五六—五七年に於ける英國の小麥の價格に矛盾する。第二にこの理論は、相當長期間に於ける平均的價格に就いて現實的に眞なりと解されてはならない。それは例へば米の煙草と英の綿製品との交換の現實に反する。それは假說的に眞なるもの、即ち妨碍原因なくば眞なるものと解されねばならぬ。換言すれば、該理論は現實の事實を表はすのでなく、傾向を表はすものと解されねばならない。この場合、該理論は決して誤つてゐるのではない。重力の法則は、たとへ重力が摩擦の作用で打消されてゐても、誤つてゐるのではない。これと同じである。法則は作用するのであるが、その作用はそれより結果する現象を妨碍し變更せしむる他原理の力に依つて抑えられるのであると(註四〇)。

如上の所言に依つて看るに、「經濟法則」とは「經濟的事實と事實との間、又は經濟事實とその原因との間に存する一定の恒常的關係」を意味する。「恒常的關係」とは「諸原因が同一なる限り、結果も變らない」との意味であり「一定の環境の裡に於いては、人はしかく行ひ易きものである」との意味であり、換言すれば「假說的に眞なるもの、妨碍原因なくば眞なるもの」との意味である。この意味に於いて、それは重力の如き物理法則と異らないのである。そしてこれは「勿論現象間に存する自然法則である」と。この「自然」又は「自然的」といふ言葉は正統學派の好んで用ゐる表現であるが、

アモンの解釋に依れば、この表現は正統派の人々に於いては全く一定した明瞭な意味を有して居り元來誤解する何等のいはれも存在してゐないのである。それは「自然」に依つて與へられてゐる法則性といふ意味に於ける「自然法則的」を意味しないのは勿論であつて、それは單に「法則的」「合法則的」必然的を意味し、更にそれは一定の前提條件の下に合法則的であり、必然的であるといふことを含んでゐると(註四一)。この解釋はオプラーに依つて反駁を蒙つたが、少くともケアンズについては正しいと云ひ得る樣に思ふ。更に卒直に云ふを許されるならばミル及リカアドオに就いても眞なりと言ひたいのである。併しオプラーの看る處では、かくの如く解する事に依つて、古典派の法則概念は既に、假說的因果法則の認識論的に確立された概念――近代科學によく知られたる如き――となつた。けれどもこの見解は經濟法則の古典的概念を强制する事になる。その當時の經濟學者は尙余りに深く自然權の束縛の下に立つてゐた爲めに、法則が人間の本性の中に又は經濟事象の結果の中に完結してゐる事を否定し得なかつた。故に彼等は法則を人間思惟の認識手段として確實に理解しなかつたと(註四二)。筆者を以てみるならば、アモン云ふが如くに明白に「法則概念」が總ての古典派に依つて理解されてゐたとは思へない。アモンと雖も、必ずしもそこまで主張するものではないと思ふ。たゞ古典派の法則概念は結局さうなるといふ意味に過ぎないであらう。併しその意味に於いてでも、之を古典派全般に適用する事は無理である。アダム・スミスを採りてみよ、彼こそはオプラーの言ふ如く、自然權の束縛下に充分その身を置いたのであつて、その「自然」概念も、多分に形而上學的觀念を包含し、決して「單に因果決定的」の意のみを有するものでない。この點リカアドオ等と著るしく異る。筆者はリカアドオを以て、「余りにも深く自然權の束縛の下に在つた」とは解し得ない。用語は「自然」「自然的」等の語が用ゐられるけれども、オプラー自ら云ふ如く、古典派の研究に際しては、吾等は用語に迷はされてはならないのである。町人リカアドオの哲學的背景は、自然哲學に非ずして、功利主義であつた。かくてアモンの云ふ如く「全く一定した明瞭な意味を持つてゐる」のでもない。マルサス、殊に人口法則に於けるマルサスはその法則の假說的性質を認識する事リカアドオよりも少なる如くである。一般に正統派を以て法則の時間的・空間的制約を無視すると考へる事は妥當ではないが、ロバート・マルサスは經濟學を以て永久的妥當性を有する社會的自然法則の發見を事とするとの見解に最も接近してゐる。彼は彼の人口法則に於いて、破らるゝ事なき社會的自然法則を發見したと信じた(註四三)。シイニオア、ケアンズ、就中ミルに在つては、少くともその方法理論に於いては、經濟法則の假說的・因果法則的性質は明白に認識されたと主張し得る。

四　經濟學方法論

ケアンズの觀る處によれば、經濟學はその根本的命題に就いて著るしく不安定不確實な狀態に存する。かゝる狀態の原因を探究して彼は四個を得た。第一は經濟學と道德的諸科學との類緣である。第二はその結論が實際生活に深く直接に關聯せる事である。第三は經濟學の術語が俗語から採られてゐる事である。併し此等三個の原因は這般の狀態の幾分を說明するに過ぎない。最も重要なる原因は經濟學研究法の缺點に存する。この方法上の誤謬は經濟學が成就せる實踐的成功に基因する。

經濟學が自己本來の內在的證據以外には何等自己を公衆の面前に顯示すべきものを有しなかつた時に於ては、經濟學の素養なき者にして經濟問題を論ずるものは稀であつた。然るに自由貿易の廣大なる成功に依つて、經濟學の據つて立つ原理の正當なる事が經濟的に立證されるに及んで、經濟的議論を行ふの態樣並びに經濟學上の事に携る者の種類に、目立つた變化が起つた。その資格なきものが經濟學を論じ、資格あるものも、事實と自由貿易の結果の裡に一層通俗的な目覺しい立證を發見せんと努むるに至つた。爲めに第十九世紀初期に於ける經濟學研究者の特性なりし嚴格にして論理的な型は聽衆の變化せる性質に適合せん爲めに變更された。經濟學の議論は益統計的性質を帶び來り、原理に訴へずして結果に訴へらるゝに至つた。かくて經濟學はアタランタの運命に逢着せんとするかの如くであると（註四四）。之を救ふの道は獨り方法論の確立あるのみ。

「何等かの研究に於いて吾人が追隨する方法は、該研究の性質と目的とに依つて決定されなければならない」（註四五）。これ方法論に對するケアンズの根本的見解である。これが是非並びにこれと方法論との關係等の問題は以下方法論の敍述中に自ら明らかとなるであらう。

經濟學方法論の最初の宣明者ジャン・バチスト・セイは歸納法の友であつた。「從來經濟學に於ては眞理の樹立に先つて臆說を立てた。然るに其後に至つて、ベーコン以來他のあらゆる科學の進歩に多大の貢獻を致せる方法を、經濟學にも應用するに至つた。詳言すれば、觀察と經驗に依つて眞なる事の證明されたる事實でなければ、眞理と認めず、之より當然に引出し得る結論でなければ、恒常不變の眞理と認めずとする所の經驗的方法を採用するに至つた」と（註四六）。かくの如き意見はその反面に於て抽象法の排擊を意味する。「リカアドオ一派の英國經濟學者は予の見る處を以てすれば、一般的經驗に非ざればその基礎として承認する事なき何れの科學に於けると等しく、經濟學に於ても採用し難き一種の論法を斯學に導き入れようとした。抽象の上に安座する論法これである。——リカアドオが地主の所得は物の價格の一部を構成しないと言ふ時、彼が議論に基いて原則を樹立した事は掩ふべからざる事實である。かゝる研究方法は經驗と良識より離れざらんとする第十九世紀の研究法でない。これ驕てトーマス・トウク、ロバート・ハミルトンその他、多數の優秀なる英國の諸經濟學者がスミスの研究方法を遵奉せる所以である。洵に經濟學は觀察の科學となる時始めて一個の科學となるのである」と（註四七）。

之に反しケアンズは先づ歸納法を排斥する。その言ふ處に依れば、普通に經濟學は歸納法に依つて研究すべしとの意見が行はれてゐるが、歸納法なる語には廣狹二樣の意義が存する。故に先づその意味を確定せねばならぬ。例へばミルに從へば「歸納的論理は單に如何にして自然の法則を確知するかのみならず、之を確知したる後、その結果にまで之を辿る事をも包含する」と。かくの如く解するならば歸納法は演釋法の對立をなすものでなく、之をも包攝するものである。この意味に於ける歸納法に對立するものは「形而上學的方法」である。勿論かゝる方法は經濟學に行はるべくもない。故に歸納法は狹義に解されなければならない。それは或種類の一定個體に眞なる事は、その全種類に就いて眞なりと論結し、又は一定時に眞なる事は、總ての時に於ける同樣の環境に於て眞なりと論結するの一過程である。從つて歸納法の特性は特殊から一般へ、個々の事實から法則への上昇を

包含する事である。かく狹義に解されても、尙少なからざる人々が、歸納法は觀察及實驗と結合して經濟研究の眞道を成すと主張する。彼等の見解に從へば、學徒は先づ價格、地代、分配方法の變化等の富の現象を蒐集し分類する事から始めねばならぬ。約言すれば、各國の現實的經驗に於て現はれたまゝの總ての事實を蒐集分類せねばならぬ。然る後、かくして得たる諸結果を素材として使用し、之に依つて、それ等を支配する原因と法則とへ直接又は間接推理に依つて上昇せねばならぬ。然るに吾人の觀察に現れる來る時、富の現象は思辨的研究が取扱ふべき最も複雜なる現象の一である。それ等は頗る多樣なる諸勢力の成果であつて、各勢力は同時に作用し、相互に合流し反流し、種々なる方法で修正し合ふのである。かく高度の複雜性が現象を特性づける時、總て同時に作用する多數の原因に影響される時、かゝる結果とその原因及び法則との關係を、歸納的に即ち、特殊的事實から上へと議論する事に依つて、樹立せんが爲めには、字義通りに嚴格な實驗力がなければならぬ。然るに社會的經濟的問題の研究者には、之は絶對に拒まれてゐると(註四八)。こゝまでの議論を檢するにその中心たるものは「經濟現象の複雜性」である。之あるが爲めに嚴格なる實驗力を必要とし、この必要が滿されざる爲めに歸納法不可の論が生れる譯である。かゝる論構は「研究の性質と目的に依つて方法が定る」との前述せる根本的命題に合致する。從つてこの點には問題はない。寧ろ吾等が問はんとする處は、現象の高度なる複雜性は、これに對して歸納法を適用するに當り、何故嚴格な實驗力を必要とするかである。ケアンズの言葉で云へば何故「一條件(實驗力)が全く缺くべからざるものである」のか。この點に就いてはケアンズはミルの意見に據つてゐる。從つてしばらくミルの所見を窺ふを便とする。

凡そ現象間の因果關係を見るに、或一つの現象は必ずしも常に同一原因に依つて惹起されるものとは限らない。例へば熱の發生原因に燃燒、摩擦等を擧げ得る如きである。この「原因の複存」は「結果の錯綜」と共に、歸納法に對する重大なる困難の原因となる。發見の方法としての歸納法は觀察及實驗の二者である。この兩者の間には眞の論理學的差違がある譯ではない。たゞ前者は或現象の要因よりも現象そのものが吾等に近い場合、これよりしてその原因を見出すに良く、後者は要因が生ずべき結果を知るに良き實踐上の差違があるに過ぎない。

さて第一の單純なる觀察法はこの場合適用し得ない。何故ならば、「原因の複存」が存する場合には論證の方法たる一致法又は差違法の適用に必要な條件が滿されないのみならず、そも〳〵一致法は一結果は一原因の所產なりと前提してゐるからである。

第二に純粹なる實驗的方法も亦用ゐ難い。この方法が前者と異る所は前者が結果に注意せるに對し、これは原因の種々なる結合を直接試み、以てその結果如何に注目する。之を行はんが爲めには先づ當該對象たる要因を、吾人が精確に知つてゐる一團の事情の中へ、導き入れなければならない。第二に、その場合に於て、その存在が未知なる事情は一つもあつてはならない。第三に吾人の既知なる事情の一つでもが、吾人の研究せんとする要因の結果と混合する如き結果を生じてはならない。この三條件が現實に滿される事は不可能である。從つて實驗前の狀態と實驗後の狀態とを比較する事に依つて、即ち、異時に於ける同一事の比較に依つて差異法を適用せんとするも、「結果の錯綜」が

存する場合には、全く不可能である。更らに之と異り、異る事例の比較に依つて差違法を適用せんとするも、かゝる複雜な現象に在つては、一點に於てのみ異り、他の總ての點に於て同一なる二現象の發生そのものが疑問である。よしや發生するとしても、その兩者が精密に然る事を知り得ない。かくて複雜なる場合に於ては、實驗方法の科學的使用といふが如きものは、全然問題にならないのであると（註四九）。

かくの如きミルの意見は「字義通りに嚴格なる實驗力を必要とする」といふよりも、寧ろ實驗無用論である。論旨全般より考へる時ケアンズの「字義通り嚴格なる」云々の言辭も、實はかゝる實驗の不可能を含意すると解して差支へあるまい。然らば一歩を進めて率直に實驗無用を高唱するに如くはなかつた。然るに彼はその擧に出でずして、經濟學者の實驗不可能を理由とした。然るにこの實驗不可能論たるや、ミル說の敷延に過ぎない。

經濟學者は經濟現象を與へられたまゝに受取らねばならぬ。然るにかく與へられたる事實からは、若し彼が嚴格な歸納の道以外の道を利用しようとするならば、彼の得るものは單なる經驗的概括に過ぎない。苟くも「科學的」なる名に値する社會的又は經濟的眞理は、この方法に依つて未だ一も發見されたる事なく、恐らくは將來に於てもないであらうと（註五〇）。

歸納法を使用し得ざるの不利益は、又經濟學その他社會的研究を爲すものに特有なる一長所に依つて充分に補はれる。それは彼等が窮極的原因の知識から出發するの一事である。この事を明にする爲めには、自然界の研究者がその研究の出發に際して如何なる地位に立つてゐるか、亦、研究の進むにつれて如何にその地位が變化するかを看て、之と經濟學者のそれとを比較するが捷徑である。

自然界研究の第一歩に於ける研究者は、現象の釋き難き謎に取圍まれて茫然佇立する。その混迷を解くべき緒さへもない。かくて最初の思想家達は何等かの包括的な、一切を說明する原理を熱望して之が取得に努めた。タレスは之を水に見出した。或者には火であり、他の者には數であつた。やがて物的原因と法則との智識はそれ等の物的結果の觀察に依つてのみ取得せらるゝ事が、換言すれば、自然研究の最初に於て適用すべき唯一の方法は、歸納法である事が知られるに至つた。併し乍ら、ケアンズの說明に從へば、自然的發見の道として歸納法が必要とされたのは、窮極的な物的諸原理に就いて、何等直接的な智識を人類が有しないからである。故に自然現象を支配する何等かの窮極的法則が樹立せらるゝや、直ちに新たなる道が開かれる。即ち演繹法が可能となるのである。從つて最も重要なる諸自然科學の歷史が、吾人に敎ふる處は次の如くである――勞多き歸納的探究の長き時代＝この時代に於て地は整へられ種は播かれる＝は遂に一二の自然的大眞理の發見に終り、次いで收穫の時代が來る。この時代に於ては、演繹的推理の適用に依つて、經驗される事實と高き原理とを結合せしむる多數の中間原理の形に於いて、偉大なる發見の收穫があつた。然も中間原理のみではない。屢々演繹法は歸納法と結合して、最高の物的概括に到達するの手段となつた。その著例は重力の法則である。それはガリレオの發見に依つて供給されたる力學的前提から、主として演繹に依つて到達されたのである。されば歸納法は窮極的法則の發見の間、自然研究に於てのみ專ら用ゐられ、最初の大なる自然的概括が樹立されるや否や、演繹が入り來り、歸納及び歸納が與へ

る檢證手段と結合して自然的知識の急速な擴大を齎らした。かくて自然科學者の問題の論理的性質は漸時に變化するのであると(註五一)。觀察と實驗が總ての知識の窮極的基礎である限り(註五二)ケアンズの所說は少くとも知識取得の段階の論理的說明として正當といはねばならぬ。この說明乃至解釋は直ちに以て彼の經濟學方法論の基礎となるのである。

「歸納法は窮極的原因の發見に用ゐられる方法である」これ科學方法史がケアンズに敎へた命題である。然るに「經濟學者は窮極的原因の知識から出發する」從つて經濟學には歸納法は無用にして、演繹法が重用されるべきであるとの結論に達する。洵に論理は明白であるが、先づ筆者は「窮極的原因」なる概念を檢討しよう。

ケアンズに於いてこの概念は種々異つた言葉で表現されてゐるから、その比較から出發しよう。

(a)、經濟學者は窮極原因（ultimate causes）の知識から出發する」（"Character" p. 75.）

(b)、「自然現象を支配する窮極的法則が樹立されるや否や新道が開かれる」（"Character" p. 71.）

(c)、「重力及び運動の法則に就いて眞なる事は、等しく物的知識の總ての窮極的原理にも眞である」"Character" p. 71）

(d)、「人類は窮極的物的原理に就いて何等直接的知識を有せぬ」（"Character" p. 70）

更らにその一々に就いての引例をみるに、

(a)、人間に於ける一定の精神的感情及び一定の動物的性向・生產の起る物的條件・政治施設・產業技術の狀態

(b)、ガリレオ及同時代の人々が樹立せる primary dynamical principles.

(c)、光の波動說・分子說・慣性論

(d)、重力の法則・運動の法則　である。

これ等の內、(a)のみは經濟學のそれであるから、之を別とし、(b)(c)(d)に就いて考察するに、擧示されたる例は孰れも物理學の基本的原理である。從つて(b)の窮極的法則、(c)の窮極的原理(d)の窮極的物的原理の三語が全く同一對象を指すものである事は明らかである。即ち物理學の根本的原理である。こゝに「根本的」は「至大なる重要性」といふ意味ではない。より上位の原理に依つて說明されない原理、それ自身がより上位の原理よりの結論たらざる原理といふ意味である。ケアンズは次の如く說明する「重力の法則及運動の法則はかゝる原理中にあつて最も確實にして最もよく樹立されたものである。併しその依りて立つ證據は何であるか。それは吾人の意識に見出されはしない。亦、吾人の感覺に明らかなものとする事も出來ない。それは吾人の知性に訴へる事に依つてのみ樹立され得る。總てかゝる原理の立證は、これ等の原理が存在すると假定すれば、諸現象が之に依つて說明されるといふ事に歸着する。即ち、それ等はそれ等の物理的結果を通じてのみ吾人に知られるのである」と(註八〇)。然るに(a)に於ける擧例は、例へば政治施設の如きは決してかゝる意味に於ける窮極原理といはるべきものでない。從つて兩者が同一概念中に置かれるのはかゝる內容を全く顧みることなく、單に論理形式上の地位からである樣に思はれる。即ち兩者が「推理の前提」としてゞある如くである。實にケアンズは(a)の擧例の後に直ちに語をついで「換言すれば經濟學の前提は、他の

知識部門の結論又は近接的現象である」（註五三）と述べてゐる。然らば兩者は同一意味に於いて前提なのであるか。(a)(b)及び(c)に擧げられたるものは確に爾後の推理の前提である。そして同時にそれ自身が物理學の法則である。然るに政治施設の如きは、その下に起る經濟現象を論ずる場合には前提であるけれども、それ自身は經濟法則ではない。否、經濟現象でさへもない。從つて後者が經濟學の前提、換言すればその窮極原理たる意味と、前者が物理學の窮極原理たる意味とは異るのである。故に前者の發見にのみ歸納法が必要である事、然るに後者は既知たる事の二つからして、直ちに、經濟學に對する歸納法の無用を論結し難い樣に思はれる。かゝる論理的誤謬は如何にして生じたのであるか。彼は政治施設、人間に於ける一定の精神的感情等を經濟學の窮極原因なりと稱してゐるが、抑々かゝる認識即ち、それ等の施設、感情と經濟現象との因果關係の存在の認識は如何にして生じたのであるか。この認識過程を全然考慮しない事に、這個の誤謬はその端を發せるものゝ如くである。それ等は結局經濟現象の觀察を通じて知られたに外ならない。この意味に於いて經濟學の方法が、その當初に於いて、アポステリオリなものから全く自由であると言ふ事は、決して穩當ではない。ハスバッハはミルを批評して「ミルは經濟學者は當初から現象の原因を知つて居り、經濟生活の法則を發見するには、たゞそれ等の原因から演繹すればよいとの謬想から充分脫し得なかつた」（註五四）と云つてゐるが、この事は實に良くケアンズの場合をも道破せるものといひ得られる。まだしもミルの如く「原因の合成」に、即ち政治科學の對象たる現象の本質に演繹法採用の理由を求める方が遙に勝つてゐたと思ふ。孰れにせよ、その用語の不正確不統一が示す如く、ケアンズに於ける「窮極原因」なる概念は、概念それ自身が判然しないばかりでなく、その論理形式上の地位に就いても明確な說明が與へられてゐない。否、充分それが考察されてあるとさへも思へない。一言にして言へば、論理學的檢討の甚だしき不足が、曝露されてゐると言はなければならない。經濟學の論理的性質と方法との研究を主眼とせる著者が、その「方法」決定の肝要點を見失つた事は重大であらう。

又、これとは別に、窮極原因そのものの取得に歸納法は不必要であるか。「その發見に何等嚴密な歸納法を要しない」（註五五）との答が爲される。その立證は引例的である。例へば一農業家が何故小麥の生產に從事するか、又、何故或る點まで土地を耕作するか、而して何故それ以上耕作しないかを知る爲めに、小麥及耕作統計から出發して、一方には農業家の勤勞を刺戟する心的感情に至る、他方には該勤勞の生產性が依存する土壤の物的性質に至る幾つか概括から、吾人の知識を引出す必要はない。何故ならば吾人自身の心裡に浮ぶところのものゝ意識に於いて並びに吾人の感覺が外界の事實に就いて吾人に傳へる消息に於いて、それ等の原因の直接的知識を有し得るからである。或は又、富の生產及び分配の依存する他の諸原因――自然的原因の物的性質及び增殖力に關する人間の生理的特性に對しても、種類は異るが直接立證が可能である。即ち、吾人の意識に訴へないが、感覺に訴へる處の立證である。例へば收穫遞減の法則は、土壤に對する直接的な物的實驗に依つて樹立され得るものであり、その結果に就いて吾人の感覺は之を判定し得るのである。故に、經濟學の物的前提並びに精神的前提の場合に於いて、吾人は自然科學の窮極的眞理を樹立する精練なる歸納的方法とは全く無關係であると（註五六）。前に記述したる如く、物理學の窮極原因と稱せらるゝも

のは、洵に重要なる物理學の「法則」であるに對し、經濟學の前提と稱せらるゝものは單なる事實に過ぎない。これが發見の爲めに、精練なる歸納法を必要とせざる如きは、正に自明の事といふべきである。

次いで假說論に移る。經濟學者は實驗を行ふ事が出來ない。その代用物として假說を用ゐる。一定の狀態を心裡に想定し、然る後、その經濟的特性を檢せんとする何等かの要因が、その狀態の下に作用し來るものとして、その結果を推理し、以て一理論に到達するのである。固よりかくして得たる結論は假說的眞理たるに過ぎない。併し乍ら、單なる經驗法則を別にすれば、如何なる自然の法則と雖も假說的に眞たらざるを得ない。この方法は依つて以て經濟法則の知識を取得すべき一方法であり、精神的に行はるゝ實驗の性質を有するものである。けれどもこれは純正なる實驗よりは非常に劣るものである。何故ならば假說的實驗に在つては、存在すると想定された條件の或ものが、推理の途中で看過される危險があるのみならず、亦考察されてゐる特定原因の作用を樹立すべき推理上に、缺陷の存する惧がある。かくてこの精神的實驗は、檢證に依つて補はれるを便とする。假說的實驗に依つて一結論に到達せる時は、該假說に可及的近接せる實例を探究し、そこに於ける現實的結果と假說的結論とを對比しなければならぬ。多くの場合兩者の間には間隙が見出される。この間隙が如何なる程度まで、既知の妨碍原因に依つて說明され得るかを考察しなければならぬ。然も不幸にして經濟學に於ける檢證は、頗る不完全にしか行はれ得ない。それにも拘らず、注意深く行はれるならば、演繹推理に依つて得たる結論に、高度の信賴性を肯定するに充分なる確證を、屢〻與へ得るものであると（註五七）。固より假說方法は自然科學に於いても用ゐられるが、その用途が異る。經濟學に於いては、假說は斯學の根本的假說の演繹的展開に必要なれども事例の本質上實際には與へられない既知不變の條件を、推理者に供結する爲めに用ゐられる。然るに自然科學に於いては、必要なる條件は之を實際に作り得るが故に、この目的に假說が用ゐられる事はない。假說は窮極的原因と法則とに到達する手段として用ゐられる。これらは既述の如く、感覺に依つても意識に依つても取得されない。從つて推定・臆測・假說が自然その手段となる。從つて自然科學者は窮極的原因及び法則の性質に關して假說を作り、這個の推定の當否を檢するに適當な諸條件を作る。即ち、その假說を檢證すべき實驗を行ふのであると（註五八）。つまり經濟學者は既知の諸條件の「組合せ」に於いて假說を用ゐ、自然科學者はその條件の性質に就いて、假說を用ゐるのであるといふ。

かくの如く、經濟學者と自然科學者とでは、各自が取扱ふ問題の論理的性質が異る。從つて自然科學に於いて成功せる方法を經濟學に用ゐんとする事は、非常に誤謬といはねばならぬ。寧ろ自然科學の先例は、經濟學者が演繹を以てその主たる手段と看做すべきを敎えるものである。觀察と經驗が與へる諸事實は、事情の許す限り、演繹的に得たる結論の檢證手段として用ゐるべく並びに實際と該結論との間に不一致を生ずる場合に、かゝる不一致を生ぜしむる妨碍原因の性質を確める爲めに用ゐるべきである。演繹的段階に到達せる、即ち、その問題の論理的性質に於いて、經濟學との類似を示す自然科學に於いても、經驗に訴へるの方法は、かくの如くであり、かくの如きのみであると（註五九）。こゝに提示されたる假說的方法は勿論一種の演繹法であり、然も最大なる效用を有

するの方法である。たゞ之を如何なる意味に於けるにせよ、「實驗」と呼ぶは用語の正當を得たるものと言ひ難い（註六〇）。

這般の方法中に於ける檢證及び妨碍原因の發見方法に關聯して、經濟學の推理に於ける統計の用途が見出される。統計は特殊研究の爲めに整頓され分類されたる事實の蒐集である。この組織ある觀察法を利用する事に依りて、斯學の根本的假說からの推理の正確さを、最も良く照査し檢證し得ると共に、亦これを用ゐて、事件の實際的徑路を變更せしむる小要因又は妨碍的要因の作用を、良く知る事が出來るのであると（註六一）。"Character" 第四講に於いて「經濟學の進歩に於いて、統計の妥當なる使用の最善なる一例」としてトウクの物價論を擧げてゐる。

定說に依れば、貨幣の價値は他の事情にして等しき限り、その數量に反比例するといふ。然るにトウクの物價の研究は物價と流通との間には何等かゝる對應が見出されなかつた。これこそは抽象的推理の結論と實際現象との間に不一致の一例であり、これを解明する事は統計的研究の任務である。論理的過程に誤謬が存するか、若しくは這般の現象に影響する何等かの原因が看過されたか、その孰れかでなければならない、トウクは兩者に誤謬がある事を示した。第一には貨幣が物價に及ぼす影響に於ける性質と手形割引に於いて銀行が發行する兌換券の該性質とを區別するを誤れる推理上の誤謬、第二には他の信用形態が、銀行券と相並んで、購買力として用ゐられる場合に、物價に及ぼす妨碍的勢力の看過である。かくて結局トウクは通說と反對に、紙幣流通高は一般物價水準の原因に非ずしてその結果であり、後者の變動は前者のそれに追隨せずして之に先行するとの理論に到達したのであると（註六三）。

この檢證の問題は假說的演繹的科學に在つては頗る重要である。ミルは之を甚だ重要視する。ミルの演繹法理論に依れば、演繹法は直接歸納、演繹推理及檢證の三段階から成る。凡そ演繹法の問題は、相合して一結果を產出する種々なる傾向の法則から、該結果の法則を發見する事である。故に第一要件はこれ等傾向の法則を知る事である。即ち併合的諸原因各個の法則を知る事である。之が爲めには、豫め各原因個々に關する觀察又は實驗の過程がなければならぬ。若しくは之に先だつ演繹が無ければならぬ。そしてこの演繹も亦その終局前提の爲めに、觀察又は實驗に賴らざるを得ない。第二要件は一定の諸原因の結合から、如何なる結果が生ずべきかを、該諸原因の法則から決定する事である。即ち、演繹推理を行ふ事である。かゝる演繹推理に依つて、或程度まで、吾々は一定の原因結合から如何なる結果が生ずべきか、又如何なる原因結合が或一定の結果を生ずべきやの問に答へる事が出來る。けれどもこの第二段階までゞは、その結論に多くの疑が持たれ得る。この疑問の余地なからしむるものが檢證であり、これが演繹法の第三段階を形成する。これはミルに在つては、推理の結論を具體的現象それ自體と、又はそれ等の經驗的法則に比較對象する事に依つて爲される。ケアンズに在つては現に前者のみが考へられ、後者の檢證方法は省みられてゐない。而して、その對照に依つて兩者が一致する時、その推論の結論は信賴するに足るものとなる。而してミルは曰く「具體的演繹法の確信の基礎は、アプリオリ推理それ自身ではなく、この推理の結果とアポステリオリ觀察との符合である」と（註六二）。故にそれはケアンズの如く「檢證に依つて補はれる

を便とする」といふ如き、輕い意味のものではない。かくの如き兩者の差違は、前者が主として檢證の論理學的意義を說きたるに對し、後者がその實用價値を考慮せるが故であらう。私見を以てすれば、檢證の實踐的價値は、一理論の積極的構成よりは、寧ろ謬論の防止にある如くである。何故ならば推理の結論を一致する一實例を見出す事は決してその結論の普遍妥當性を立證しない。進んで經驗的法則と合致する事が見出されるにしても、元來經驗的法則なるものは、その法則の觀察されたる諸事實にしか妥當しないものであるから、前者の場合よりは、結論の妥當性を擴大し得るけれども、未だ充分なるものではない。之に反し、檢證に於いて、推理の結論に眞に反する僅々一個の實例をでも發見するならば、該結論の普遍妥當性は全く覆る。故に檢證の效果は積極に於いてよりも消極に於いて大である。

尙、數學的方法に對してはケアンズは全く讃意を表しない。この事 "Character" 第二版序文に述べられてゐる。「本書が初めて出來た時には、尙、數學的方法といふものに就いては、殆んど聞く處がなかつた。これに關するその當時の余の意見は、經濟學がその前提を得るの源泉を考慮する時、斯科學は數學的取扱を容れ得ないものであるといふのであつた。その後、友人ジェヴォンズ敎授の「經濟學原理」が出版された、余の能力の許す限りジェヴォンズ敎授の議論を熟慮したが數學に暗い余に出來る限りの範圍內に於いては、余は尙舊說を固持する。余は他の方法に依つて得たる經濟理論を表明せんが爲めに、幾何學的圖形又は數學式を用ゐうべきを否定しようとは思はない。余が敢て否定せんとするは、經濟學的知識がかゝる手段に依つて擴張され得るとのジェヴォンズ、その他の主張する學說である。即ち、力學的眞理や物理學的眞理の發展に用ゐられてゐると同樣に、經濟學的眞理の發展にも、數學が適用され得るとの學說である。人の感情が精密な數量的形式中に表現され得る事が示されない限り或は又、經濟現象が感情に依存しないといふ事が示されない限り、余は余の結論を如何にして廻避すべきかを知らない、ジェヴォンズ氏は曰ふ「經濟學の諸法則は、量を論じ、量の關係を論ずるが故に、大部分數學的たらねばならぬ」と。若し余にして誤らずんば、ジェヴォンズ氏の立場を支持する爲めには、これ以上に、何物かゞ必要であると(註七六)。かゝる意見は「關係」としての法則を概念し得なかつた事及數學的表現と算數的表現との無意識的混合が存した事によるといへよう。彼が「數學的」と「算術的」とを時に混同せるの事實は亦次の言葉に依つても明かである。經濟學の原理が物的世界の要素及力の如くに計量され得ざるをのべたる後、「故にそれ等は算術的又は數學的表現をされる事は出來ない」(註七七)と述べてゐる。

而してこの算術的表現の不可能は、經濟學をして「精密科學」の中に座するを得ざらしむの根據と考へられた。即ち、物的科學の法則も經濟學の法則も、共に「傾向」を表はす點に於いては一であるが、前者の科學に於いては、該傾向の作用する力の程度に對して、精密なる算術的表現が得られる迄は、その傾向の發見は、以て法則の完全なる發見とは考へられない。然るに經濟學法學等の如く、その前提を人性の諸原理から引出す學問に在つては、その本質上算術的計量、從つてかゝる表現が不可能である。「この故に、經濟學は精密科學の領域から必然に除外されなければならない」と(註七八)。

筆者は之を以て、ケアンズ方法論の本論を終る。彼の方法に對する批評は諸家に依つて試みられ

てはゐるが、多くは斷片的なものに過ぎない。その中に在つて、イングラムの批評は、評者自身の立場に囚はるゝの嫌はあるも、以て傾聽に價する。「ケアンズは、その見解の外觀的な不決斷及び、眞實よりも形式的の二三讓歩あるに拘らず、最も力ある演繹的方法を支持する。彼は經濟學に於いては歸納の余地は全くないと判然主張する。洵に彼はシイニオアの見地以上に出でたものとは思はれない。ミルがこの「論理學」に於いて檢證を以て經濟法則の論證の本質的部分なりとせるに對し、ケアンズは、法則は現象の性質又は因果關係に關する斷定に非ざるが故に、そは統計的又は文書的證據に依つては樹立も拒否もされ得ないと主張する。現象に關して何事をも斷定しない命題が事實との矛盾によつて抑制される筈がない。その著作の疑ひもなき有能さにも拘らず、或點に於いては、それは方法論の退歩を示すものゝ如く、將來に向つては歴史的興味を有し得るに過ぎない。この點より考ふる時、ミル及ケアンズの斯學方法論上の勞作は、內的には不健全なれども、一の重要な消極的效果を有する。彼等は經濟學をその傳統的地位より引下し、通說に二つの修正を行ふ事に依つて、その誇大なる抱負を抑へた。その一は經濟法則の純抽象性の高唱であり、他は經濟學と經濟的術との竣別であつた。」と（註七九）　この批評の價値は、這般の方法論の記述そのものが、自ら示すであらう。

五　經濟學方法史に關するケアンズの見解

上來記述し來れる處を以て、ケアンズ方法論の大要は、不完全ながら紹介し得たことゝ信じる。而してケアンズの解する處に依れば、經濟學の進歩に大いなる貢獻を爲せる人々が採れる方法は、皆彼が說く處の方法であり、チュルゴー、スミス、マルサス、リカアドオ、ミル、シイニオア皆然りであるといふ（註六四）。このいはゞ正統派の方法史に對するケアンズの見解を檢討する事を以て、本稿の末尾としたい。

古典經濟學の方法は屢〻、特に歴史派の人々に依つて、殆んど極度に抽象的なものと考へられた。ブレンタノに依れば、古典經濟學は職業・階級・國民性及自由人の文化階段等に於ける一切の特殊性を抽象した。彼等は種族・宗敎・時代の特異性を全く認識しなかつた。彼等の心理學に於いてはたゞ二つの人間行動の動機しか存在しない。その一は最大可能量の利益に對する努力である。性的動機は彼等にとつて尙一層有力なものである。兩者が衝突する事、後者は前者を屈服せしめる。併し乍ら通常は利益衡動が支配する云々と（註六五）。固よりかくの如きは寧ろ極端なる見解であるが、是程ではなくも、かゝる意見が決して少くない事は事實であらう。シラーは這般の見解を駁せんが爲めに、一々スミス、マルサス、セイ、リカアドオ、の著書の中から、多數の反證を擧げて論じ、結局歴史派の人々が擧示する個々の場合は、古典派が個々の點で特殊性を顧みなかつたといふ事を立證し得るにとゞまり、總體としての歴史派の非難は成立しないと主張する（註六六）。シラーの丹念なる努力は之を多とするも、古典派の著書の中に、這般の見解を駁すべき文章意見を見出すは、本來難事ではない。正當學派の論敵クニースさへも之を各所に見出してゐる。然もかゝる方法に依つて得る處は、古典派が個々の場合に、特殊性を認めたる事を主張し得るに止り、全體としてのそれを充分に立證し得ない。シラーが歴史派に與へたる結論は直ちに以て彼自らにも與へらるべきもの

なのである。かゝる名題に關する論議は今少しく方法論的でなければならない。

スミス經濟學の理論的目的は、經濟生活に於ける自然法則の發見である。併し乍ら、スミスに於ける法則概念は、リカアドオ及ミル以後の法則概念に比して、著るしく形而上學的である。そは現象間の恒常的關係としてよりも、遙に攝理の法則として理解された。そは經濟生活に表現されたる「自然法」であつた。かゝるものとしての法則の存在を認識する限りに於いて、スミスの方法は斷じて歸納法的ではない。そは形而上學的に取得されたるドグマである。けれども具體的法則としての經濟法則の認識に於いては、必ずしも形而上學的ではない。そこに在つては多くの歸納法と多くの演繹法とが共に見出される。筆者はスミスの方法を最も良く示すべきものゝ一を、その分業論に見る。先づスミスの眼前に在るものは分業と伴ふ生產力の增大であつた。兩者は單に共存するのみでなく分業の强化が生產力を增大せしむるの事例は恐らくスミスの目擊する處であつたらう。孰れにせよ、分業を以て生產力の增大の一原因とする事は、恐らく事實の觀察から導かれたものであらう。けれども分業は一個の經濟現象であつて、從つて更にその原因が說明されなければならない。スミスはその原因として交換傾向を見出した。この論理過程は如何なるものであるか。交換傾向は直接意識に依つて取得されるものでなく、交換現象を通じてその存在が認められる。この交換傾向は如何にして分業に連絡せしめられるか、スミスが最初に認めたる分業即ち單なる勞働分割としての分業とは少くとも直接には結合しない。そこでスミスは分業なる觀念を division of Occupations にまで擴大した。即ち勞働過程に於ける分業概念は、產業組織上の概念に轉化した。かゝる意味の分業は勿論交換なくしては存在しない。かくて交換は分業の必須條件と考へられる。けれども交換も、一の經濟現象たる限り、說明さるべき事を必要とする。かくて終局的說明として交換傾向が持出される。この終局的段階に於ける論理過程は最も不明瞭であるが、少くとも交換は交換傾向より、演繹的に結論されたのではなくして、經濟社會の一般的事實としての交換の存在の觀察から、交換傾向が認められたのであらう。上來の方法は勿論眞正嚴格なる歸納法といふべきものではないが、先づ眼前の事實から出發して、その事實を說明する處の、而してその事實よりは廣い原理に到達するの過程を辿つてゐる。この意味に於いて、歸納的である。かくして得たる終局的結果は、その論理過程を逆にして、之に依つて當初の事實が說明される時、初めて眞理たるの資格を取得する。實にスミスは更らにこの得たる交換本能よりして、如何に分業が發達し行くかの徑路を說明してゐる（註八一）。之と反對の經過を辿るものは、社會調和論である。その要素をなす三つの觀念、即ち、自然法の存在、その自然法が人間にとりて概ね有益に作用する事並びに人をして「自然」の目的に合致せしむる手段として與られたるものとしての自利の觀念は、總て形而上學的ドグマであつて、經驗よりの歸納ではない。而してこの先驗的三概念より社會調和論が演繹される。而してスミスはこの結論に合致する多數の事實を、現實的經濟世界の中に探究して之を吾々に示すと共に、尙之に對する例外的事實をも提示してゐる。洵にスミスの問題は、經濟現象をその現實に於いて理解する事であり、この目的の爲めには、スミスは如何なる「方法」をも擇ばずして採用した。從つて、ケアンズの如くに單純に解釋し得ないといはねばならぬ。

リカアドオと對立する意味に於いて、スミスの歸納的傾向を踏襲せるものと看做さるゝはマルサスである。然るにケアンズは此の人の方法をも演繹的なりと主張する。「人口は食物よりも速かに增加する傾向がある」との命題は、ケアンズに依れば「人口が實際に速かに增加する」といふ意味ではない。マルサスの人口論が立證せんとするは次の事であつた。即ち、人類の增加が依存する、人性の力と性向を考慮し、更に外界の現實的事情及び人間が任意に富源に對して行使し得る力を考慮するならば、人間の裡には、生存手段が增加され得る以上に速かに蓄殖せんとする恒常的傾向が存するといふ事であつたといふ。マルサスは一方に於いて、人口原理の自然的强さを知らんとした。これが爲めに彼は該原理が障碍を受くること最も少なる事情の下に於けるものをみんとした。そして新植民地がえらばれた。こゝに於いては、二十五年毎に倍加してゐた。かくてマルサスはこの率を以て該原理の自然的强さ、即ち人口が不斷に增加せんとするの傾向ある率を表はすものと結論した。他方に於いて食物は、耕作可能面積の制限されたること、及び收穫遞減の法則に依つて、這個の人口增加率に及び得ない事を見出した。「マルサスに依る此等の事實の考察の結果はかの人口論の表明であつた」と（註六七）。かくの如きマルサスの方法はケアンズに依れば「重要なる經濟學上の諸眞理が發見せらるべき唯一のコースである」「彼の方法は余が經濟學の科學的方法として推賞せるところのものに精密に一致する。彼は人性の既知なる原理の本質と力との考察より始めた。彼はその原理が、その下に作用する外界的條件を考察に入れた。彼はそれ等の確知された外的條件の下に於いて無拘束的に作用するものと想定して、それより生ずべき諸結果を辿つた。次いで事實に於いて該原理が如何程まで抑制されたるかを研究した。而して最後に、それに依つて該抑制が行はれる處の反對的原因の性質を研究した。これ等の手段に依つて人性原理に於ける窮極的原因と人類の集團の狀態が食物に關して依存する外界の事情に到達した」と（註六八）。

筆者はマルサスが驚くばかり多數の事實を蒐集せる事を、斷じて看過するものでない。亦多數の碩學が彼の方法を以て歸納的なりと解するを無視するものでもない。けれども尙、這個ケアンズの方法的解釋に接して、會心の微笑を禁じ得ざるものである。

抽象經濟學の眞の創始者（註六九）デウイド・リカアドオの方法を以て、歸納的方法なりとする主張には、筆者は未だ遭遇した事がない。正に彼は抽象的方法の權化たるの觀がある。されば如何に彼が抽象的であつたか述べる事は無用であらう。併し乍ら、マルサスの歸納的傾向を過度に力說すべからざると等しく、リカアドオの方法に於ける「經驗」の意義をも忘却してはならない。オブラーの言ふが如く、分析的方法の概念としての古典的法則概念は、經驗との關係を忘れてはゐない。リカアドオの著作には一般に何等の事實的資料がなく、寧ろそれの思惟に依つて作られたエキスが存在する。それにも拘らず彼の法則は經濟生活の極め確實なる經驗的觀察に遡る事が出來る（註七〇）。ケアンズの說明を俟つまでもなく、例へば地代論の一前提は、同一價格を以て販賣される農產物の各部分の生產費が異る事であるが、これが土壤に對する實驗に依つて、直接的に立證され得るものである。リカアドオの如く、實際的問題の解決から經濟學研究の門に入り、本來實際家として觀察よりも事實を眼前に有したる人物が、自己の法則を形而上學的・思辨的に得られたるドグマから導かな

かつたといふ事は確かである。人は殊にリカアドオを讀むに際して、説明の徑路と研究の徑路を混同してはならない。リカアドオに於いて「經濟人」の觀念が見出される事は明らかである。然もシラーの研究が示す如く、リカアドオは決して人間並びに時間的空間的關係の差異性を看過したといふは當らない。彼はそれ等を「抽象」したのである。彼は經濟生活の主要なる事實及合則性を認識せんが爲めにそれ等を意識的に除去した。彼の方法の多くは、純粹なる思辨的といふ意味に於いて抽象的たるよりも、孤立的方法であるといふ意味に於いて抽象的である。彼の抽象は、特に經濟人と無拘束的競爭の支配に關する限り根據なきものでない。何故ならば、彼の抽象は當時の英國に決定的なりし主要なる要素の、實に忠實なる映像を與へるからである。要するに彼の嚴に普遍化された法則は經濟生活の複雜性の爲めに、やむなく個々的狀態を意識的に排除し、大いなる視點のみを顧み以て彼の時代の經濟生活の合則性を發見し、その因果的連鎖を明にせんとした事に、歸せらるべきである（註七一）。

ナッソウ・ウイリアム・シイニオアの「經濟學」一卷は、最も判然たる方法的意識を以て構成されたる抽象經濟學の典型的書物である。けれども、此處に於いても亦リカアドオの場合に於けるが如く、その「抽象」は「形而上學的・思辨的」の意味に解されてはならない。固より彼は事實よりも推論を遙に重大とする。けれどもその推論の基礎たるものは常に「事實」である。彼は眼前の事實よりす、る推理過程」といひ「事實から推理する事」といふ（註七二）。彼が經濟學の基礎として提出する四基本命題は正に觀察又は意識に依つて取得される一般的事實である（註七三）。而して又、その抽象的方法も判然たる孤立的方法を取る事が少くない。利潤率の大小と資本前拂期間の長短が勞働の生産物が如何なる割合を以て資本家と勞働者の間に分配されるかを如何にして決定するかを示すに當つて、彼は明白に八個の假説を設ける。この假説の下に於いて利潤率資本前拂期間の變動が生ずる結果を檢討する。然る後順次にその假説を除去してその結論を現實に近づかしむるのである（註七四）。かゝる演繹的推理の結論に對する彼の信頼は、洵に斷乎たるものがある。彼に從へば經濟學の前提たる四命題は殆んど立證は勿論、形式的敍述の必要さへもなき程に、明白にして一般的である。これより爲される推論は、前提が一般的たる如くに一般的であり、推理にして正確ならば、前提の如くに確實である。富の性質及生産に關するものは普遍的に眞である。富の分配に關するものは、特定國の特定の制度に依つて影響され勝ちであるけれども、事物自然の狀態を以て、一般的法則として定め得る。特定の妨碍原因に依つて生ずべき變則は後に斟酌すればよろしいのであると（註七四）。彼が實際にとれる方法又は概念は、必ずしもこの方法理論の如くに竣嚴ではないが、然も這般の方法論を讀む時、正統學派の方法に對する常套的非難は、リカアドオに向けらるゝの慣習を捨てゝ寧ろシイニオアに向けらるゝのより正當なるを感ずるであらう。ミル及ケアンズは程度の差こそあれ、共に演繹推論の檢證の必要を認めてゐるが、シイニオアは全く之に觸れて居らず、却つて「推論は推理にして正確ならば前提の如くに確實なり」と稱して、演繹推論に對する最も深い信頼を示してゐる。

ジョン・スチュアート・ミルが認容し主張したる經濟學研究法は二つである。その一にして且つ主要

なるものは、所謂具體的演繹法であり、その二は現象の異常なる複雜性が第一の方法の使用を不可能ならしむる時、之に代るべき逆演繹法である。具體的演繹法は演繹法又はアプリオリ方法の一種であるが、等しく之に屬する抽象的方法（數學に於ける如き）とは「檢證」の必要の有無によつて最も判然と區分される。例へば幾何學に在つては、一度眞なりと證明されたるものは總ての場合に眞にして、一原理から生ずる結果と他の原理から生ずる結果とは決して衝突する事がない。從つて檢證の必要がない。然るに社會科學に於いては、勿論原因より結果を推理するのではあるが、幾何學に於ける如く單に一原因の法則よりせずして、相合して結果に影響を及ぼす原因の全部を考察し、且つ之等の法則を相互に調和せしめることに依つて、之を爲すのである。けれども こゝに一つの困難がある。それは、數個の傾向を結合し、多數の共在的原因の綜合的結果を論ずる場合には、吾人はその場合に存し得べき全原因の影響を秤量し結合せざるを得ないが、これは人間能力の及ばない事である。こゝに於いて社會現象に適用される演繹的方法の缺陷は最も痛切に感じられる。こゝに到つて一度斥けられたる「經驗」は檢證の名に於いて再びその入口を見出すのである。かくの如き方法はケアンズが力說する方法と略〻一致する。この意味に於いて、ケアンスがミルも亦自己の主張する方法を採れるものといへるは正しい。けれども、所謂逆演繹法については全く當らないといふべきであらう。これこそはケアンズが徹底的に排擊せるコントの方法である。殊にコントが社會科學に對して歷史的方法を用ゐんとする理由は、社會現象の複雜性であるが、この理由はケアンズの承服し難きところである。然るにミルが逆演繹法即ち歷史的方法を採用するの理由は、「現象の異常なる複雜性」である。當抵ケアンズの承認を得らるべきでないが、ケアシズは何故か之に對して沈默を守つてゐる。

以上を通觀するに、正統學派の方法史に對するケアンズの見解は大體に於いて正鵠を得て居るといひ得べきであらう。少くともその方法論史に對しては、「逆演繹法」を除けば殆んど全く正しいといひ得るであらう。實に英國正統學派の方法論は常に演繹的方法と歸納的方法とを對立せしめ、その前者を採つて後者を斥けるに一致してゐるのである。けれどもこの對立は實は充分なる理由を有するものでない。例へばミルを見よ、彼はその法則の先驗的基礎づけを云々する。けれども實際に於いて、彼は彼の聯合の法則の一つをでも先驗的方法で得てはゐない。ミルにとつて自稱「演繹的方法」と自稱「歸納的方法」との差別は結局程度の差を意味したに過ぎない。彼は「單純な」關係には前者を「複雜な」關係には後者を適用したのである。ミルのみでない。英國正統經濟學の論理學者等が「演繹的方法」と名付け經濟學に用ゐんとしたるところのものは、個々の場合を歸納に依つて得たる「法則」の下に總括する事であつた。又は、精々で一般的、及び最も一般的法則から特殊的法則を導く事であつた。依つて以て人がかの一般的法則に達する方法、即ち歸納の方法は常に變る事なく存在するのである（註七五）。

（註　一）Werner Sombart. Die drei Nationalökonomien. S. 121.

（註　二）J. S. Mill. System of Logic. Longman's ed. p. 546.

（註　三）Mill. Autobiography. 1873. p. 160.

（註　四）Sombart. ibid. S. 124.

（註　五）高橋誠一郎　經濟學史　二七六頁。

（註　六）J. E. Cairnes. Essays in Political Economy, theoretical and applied. 1873. p. 269-276.

（註　七）Cairnes, ibid. p. 279.

（註　八）Cairnes, ibid. p. 287.

（註　九）ミル「コント實證哲學」九—一〇頁。Martineau. Comte's Positive Philosophy Vol. I. p. 2 5.

（註一〇）Martineau, ibid. Vol. II. p. 203-206.

（註一一）ミル前揭書　十五頁。

（註一二）Martineau, ibid. Vol. II. p. 204 205.

（註一三）Cairnes, ibid. p. 287.

（註一四）Cairnes, ibid. p. 297.

（註一五）Cairnes, ibid. p. 283.

（註一六）Martineau, ibid Vol. II. p. 206.

（註一七）Martineau, ibid. Vol. II. p. 206, p. 207.

（註一八）Cairnes, ibid. p. 279.

（註一九）Cairnes, ibid. p. 300.

（註二〇）Cairnes, ibid. p. 301.

（註二一）Martineau, ibid. Vol. II. p. 217.

（註二二）Cairnes, ibid. p. 306.

（註二三）Cairnes, ibid. p. 312-323.

（註二四）J. S. Mill, Early Essays by J. S. Mill, Bohn's library. p. 128.

（註二五）J. S. Mill, ibid. p. 126.

（註二六）N. W. Senior's Article. Edinburgh Review, Oct. 1848. cited in Cairnes "Character." p. 29.

（註二七）Cairnes, The Character and Logical Me.hod of Political Economy. 1875. p. 31-37.

（註二八）Cairnes "Character." p. 75.

（註二九）Cairnes "Character" p. 41.

（註三〇）Cairnes "Character" p. 42.

（註三一）Cairnes "Essays" 第六論文。

（註三二）Cairnes "Essays" p. 251.

（註三三）シイニオア「經濟學」訓譯五六頁。

（註三四）Cairnes "Character" p. 88.

（註三五）Cairnes "Essays" p. 253.

（註三六）Cairnes "Character" p. 57.

（註三七）Cairnes "Essays" p. 255.

（註三八）Cairnes "Character" p. 26.

（註三九）Cairnes Some Leading Principles of Political Economy. 1888. p. 185.

（註四〇）Cairnes "Character" p. 97.

（註四一）アルフレット・アモン「リカアド」阿部、高橋兩氏譯六頁。

（註四二）E. Oppler. Der Begriff des Wirtschaftsgesetzes in der Volkswirtschaftslehre. 1931, S. 32.

（註四三）Oppler, ibid. S. 31.

（註四四）Cairnes "Character" p. 6.

（註四五）Cairnes "Character" p. 58.

（註四六）セイ「經濟學」第一卷第一章譯上卷十頁。

（註四七）セイ「前掲書」三十、七十七、四十九頁

（註四八）Cairnes "Character" Lect. III.

（註四九）Mill, A. System of Logic. Bk. III. ch. I.

（註五〇）Cairnes "Character" p. 66.

（註五一）Cairnes "Character" p. 74.

（註五二）Mill, "Logic" p. 298.

（註五三）Cairnes "Character" p. 75.

（註五四）W. Hasbach, Zur Geschichte des Methodenstreites in der politischen Ökonomie. Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwalting und Volkswirtschaft. Bd. 19. 1895. S. 104. (Zit. Nach Oppler)

（註五五）Cairnes "Character" p. 75.

（註五六）Cairnes "Character" p. 77.

（註五七）Cairnes "Character" p. 81.

（註五八）Cairnes "Character" p. 83.

（註五九）Cairnes "Character" p. 85.

（註六〇）J. N. Keynes "The Scope and Method of Political Economy. 1917. p. 182.

（註六一）Cairnes "Character" p. 85.

（註六二）Mill "Logic" p. 299-303. p. 585.

（註六三）Cairnes "Character" p. 92.

（註六四）Cairnes "Character" p. 90.

（註六五）L. Brentano. Die Klassische National Ökonomie. 1888. S. 3 ff.(zit. nach Schüller)

（註六六）R. Schüller Die Klassische Nationalökonomie und ihre Gegner 1893 S. 6.-S. 44.

（註六七）Cairnes "Character" p. 156.

（註六八）Cairnes "Character" p. 162.

（註六九）W. Bagehot. Economic Studies 1888. p. 151.

（註七〇）Oppler, ibid, S. 35.

（註七一）Oppler, ibid, S. 36.

（註七二）シイニオア前掲書　八八頁。

（註七三）シイニオア前掲書　五六頁參。

（註七四）シイニオア前掲書　五頁。

（註七五）Sombart, ibid. S. 134.

（註七六）Cairnes "Character" p. vi-vii.

（註七七）Cairnes "Character" p. 109.

（註七八）Cairnes "Character" p. 110.

（註七九）J. K. Ingram History of Political Economy. p. 151, 152.
（註八〇）Cairnes "Character" p. 76.
（註八一）國富論、氣賀勘重譯第一篇第一、二、三章

以上

（一九三一・八・二一日）

價値學說無用論と限界效用理論

氣賀健三

一

價値に關する理論は、經濟學說史上に於て、古より論爭の絕えしこと無く、今日に至る迄依然として定說の存在し得ない最も紛爭多き問題の一つである。此問題に關して當今最も勢力のある學說は、英國の古典學派に源を發する客觀的價値學說と、一八七〇年以來主として墺太利の諸學者の努力に依つて全世界に急激に傳播せる、所謂る墺太利學派の主觀的價値學說とである。此二つの學派と雖も夫れ〳〵に全然其說を同じうする論者より成立つて居るのでは無く、同じ墺太利學派に屬する人々の間に在つても詳細なる點に就ては互に其所論を異にして居るのである。加ふるに此兩學派の論爭は、各互に自說を枉げることを欲せず、唯相手を屈服せしめんとするに急なるの餘り、益〻其論議を紛糾せしめ、價値の概念を明瞭ならしむるよりも、寧ろ之が理解を困難ならしめたかの觀があつて、各學者がそれ〴〵の立場よりせる價値學說に關する文獻は實に枚擧に遑なき程である。殊に墺太利學派の人々が價値の說明に人間の欲望の心理學的分析を試みたことは幾多の人々をして